

南房総のアミヒカリタケ

山本 充弘

カラカラ天気が続いて雨乞いしたくなるのは、お百姓とダムの管理者、それにキノコ愛好家ぐらいなものか。待ちに待った雨が降り、9月末から10月初めにかけては、南房総の大房岬でもイグチ科、オニイグチ科を筆頭にテングタケ科のキノコやハラタケ科のキノコなど沢山のキノコが発生した。その後10月17日に久しぶりにキノコ散策に大房岬に出かけた。雨の降らない日がまた何日も続いていたので心配したが、案の定ドクツルタケとベニタケ属のキノコ、それによれよれのザラエノハラタケぐらいしか見あたらない。アミヒカリタケはないかと期待して捜したが見つからない。

出会いとこれまでの経緯

アミヒカリタケにこの地で最初に出会ったのは、2009年7月4日である。倒木から出ていた白い小さなキノコを撮影し、キノコのひだを見ようと裏返しにして網目状の管孔であるのに驚いた。その時は何という名のキノコか分らずじまいになった（写真1）。

2010年の出会いは10月12日で、その日の夜、少し前に購入した日本きのこ図鑑をめくってこのキノコを探し、キシメジ科のアミヒカリタケという名前に行きついた。説明書きによれば熱帯性のキノコで日本では和歌山～沖縄と書かれている。しかも発光性があるとも書かれている。翌日このキノコを採集してきて夜中に発光しているかどうかを確認しようとしたが、特に光っているようにも見えない。2009年には、千葉市の幕張海浜公園で熱



写真1 カサの裏側は管孔状 2009.7.4

帯から亜熱帯に分布しているといわれているオオシロカラカサタケがフェアリーリング状に発生していたのに出会っていたので（温暖化の影響か？ともっぱらの噂）、南方系のアミヒカリタケが南房総で生えていてもおかしくないと思ったが、似た別の種のキノコかもしれない、ということでその時は終わりにした。その後インターネットでいろいろとアミヒカリタケに似たキノコを探してみたが見当たらないので、やはりアミヒカリタケであろうととりあえず結論付けた。

2011年は、10月13日に大房岬でまた再会した。このときは胞子紋をとり（写真2）、胞子の顕微鏡写真も撮った（写真3）。夜に発光性を確認しようとしたが、やはり発光しているようには見えない。数時間放置してキノコを置いた暗い部屋に入ってみるとほのかに光っているように見える。早速カメラをセットしてシャッターを切る。数秒間レンズが開放に

なって閉じてしまう。結果は、わずかに柄の部分に緑の光が確認できたのみであった。この弱い光では、長時間露光撮影が必要であるが、最近のカメラは操作モードがやたらと複雑でどうしてもセッティングできない。あいにくとカメラの取扱説明書は別の場所に置いてあって手元にはない。仕方なくこの年はこの程度の写真であきらめた。しかし、わずかに発光性を確認できたことで、アミヒカリタケと確信することができたのは大きな収穫であった。



写真2 胞子紋は白色

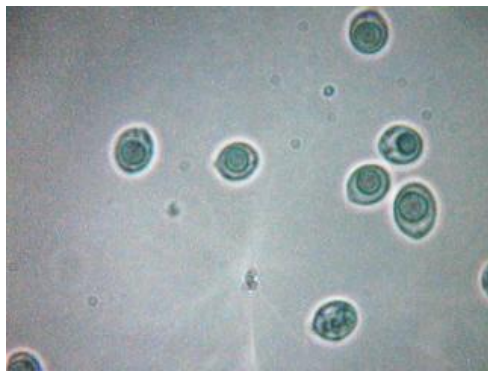


写真3 担子胞子の顕微鏡写真

同じエリアで今年も再開！

2012年10月18日は台風21号の影響で1日中かなりまとまった雨が南房総にも降った。雨後の竹の子のようだというが、雨の翌日にすぐキノコは出るだろうか、と疑いをもちつつ翌19日に大房岬へ出かけた。やはり一昨日とあまり代わり映えのしない状況の中で、唯



写真4 アミヒカリタケ 2012. 10. 20 大房岬

りっぱなアミヒカリタケが生えているのに出会うことができた（写真4）。

早速株の一部をサンプリングして家に持ち帰り、雨戸を閉めて暗室を作って放置した。しかし光を発しているようには見えない。残念なことに急な用事ができたため、その日は写真撮影をあきらめざるを得なくなってしまった。そこでキノコの根元付近を十分に水を含ませたティッシュペーパーで包み、部屋の片隅に保管して家を後にした。

チャンスは非常に少ない

翌日家に戻ってきてキノコを確認したところ、十分形をとどめていたが、白いキノコがやや茶色身帯びている。心なしか元気がない。夜中に暗闇の中でキノコに目を向けると薄ぼんやりと見えるような感じがする。早速デジカメをセットし、取り扱い説明書を確認したうえで、ISOを800とし（標準は200）F2.5で20分間レンズを開放にして撮影した（写真5）。発光性は非常に弱い。しかも、柄に強い発光性があると図鑑には説明されているが、今回は柄の部分がほとんど発光していない。やはり2日間の保管でだいぶ弱ってしまったのだろうか。

インターネットでアミヒカリタケを検索すると美しい発光写真が数多く紹介されている。しかし、そのほとんどが沖縄での撮影である。

やはり南方系のキノコだ。

新鮮なアミヒカリタケを求めて 22 日に再度生えていたところに出かけてみたが、確認できたのは干からびたわずかの残骸だけであった。その後 2012 年には、ついにアミヒカリタケに出会うことはできなかった。キノコによっては、うまく出会う時期が合わないとその年はお目にかかれないものがある。そして、来年また同じ場所に生えるという保証もない。めずらしいキノコへの出会いは、ほんとに幸運としか言いようがないものがある。

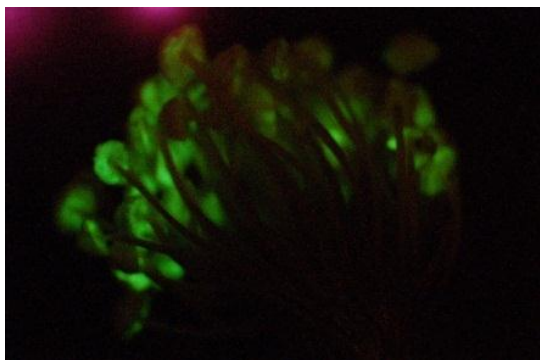


写真 5 発光 2012. 10. 20 夜中に自宅にて

光る意味はなんのため？

ところで、キノコの発光はいったい何の目的なのだろうか。誰もが持つ疑問である。生物が発光するには、それぞれ理由を持っている。私たちのおなじみの蛍の発光は、異性間の通信を主たる目的としているし、南米セラ

ードの蟻塚で怪しく光る発光体は、ヒカリコメツキムシの幼虫で、羽蟻を誘き寄せて餌とするためである。千葉県になじみの深いウミボタルは、刺激を受けると盛んに発光して外敵を威嚇する、などなど。突然変異で生まれたであろう生物の発光能力は、進化論に従えばその能力が種の保存に有利に働いているから現存しているということになる。

ではキノコの発光能力の存在意義は何か、となるとまだ解明されていないらしい。胞子を広く拡散させるために昆虫を夜呼び寄せる、という推論もあるが、それにしてもアミヒカリタケなど発光が弱すぎるし、実際に昆虫が誘き寄せられているという情報にも接したことがない。スッポンタケの嫌な臭いは蠅を誘き寄せて胞子拡散を手伝わせていると言われるが、確かに蠅がよくたかっているのを目撃できる。キノコに聞かなきや分らない、という逃げの手もあるが、キノコ愛好家の注意を引くためという理由はどうだろうか。もちろんキノコにしてみれば、冗談はよしてくれという話ではあるが。もしこのキノコが光らなければ、名前もヒカリを省いてアミシメジ（アミタケでは既にイグチの仲間にこの名があるので）とでもなっていたかもしれない。そして、私もここまで興味を示さなかったであろう。何はともあれ、光るキノコは謎めいていて魅力的であることに間違いはない。□

■小学館の図鑑 NEO キのこシール（まるごとシールブック）

写真：大作晃一，発行：小学館 2012. 9，10. 4×9. 6×0. 8，¥552＋税

ありそうでなかった、きのこのシールブック。大作さん撮影の美写シールが238枚！しかも、単にシールが冊子状になっただけではない。なんと科ごとにシートがつくれ、名前はもちろん食毒まで書いてある、ミニ図鑑でもあるのだ。じっくりながめるもよし、手帳や手紙に貼るもよし。当然、貼るとなくなってしまうため、2冊用意しておくのがおすすめ。(公)

